

高円寺阿波おどりののはじまり

「高円寺の街は戦災で焼けてしまったから、商店街といっても露天で商売をしているようなものだった。焼けなかった中野や阿佐ヶ谷に比べて経済的にはもちろん、すべてに遅れをとっていた。だから高円寺の商人はとにかく一生懸命に、どこよりも安く、を心がけて働いた。するとやがて『高円寺は安い』と評判になって、大変繁盛した。するといよいよ中野や阿佐ヶ谷の商店街が、本気を出し始めた。そうなる元々ゆとりがあるところには、高円寺はかなわなくなってねえ……」。城石昇さん(84)



草創期の記憶をひも解く

10人の証言

徳島の伝統芸能、阿波踊りが、当時の感覚として果てしなく遠い距離を超えて、遙か彼方のこの高円寺へやってきた。その経緯と辿った道筋は、高円寺の人たちの熱い気持ち抜きにしては語れない。高円寺阿波おどりの草創期である第1回目から10回目にポイントを絞り、関わってきた方々に当時を語っていただいた。

(インタビュー/佐久間通子)

その前夜、高円寺にて

ライバルは阿佐ヶ谷

昭和32年、お盆の最中である8月13日。「これからは若い者の力が必要だよ、青年部を作ろう」という話になった。30代を中心に商店の二代目を集めて商店街の青年部『ぼんぼん倶楽部(現まどか会)』を結成したんです」と森田昇栄さん(80)。若い人の力を積極的に取り入れる高円寺の風潮は、50年前も変わらなかったようです。「そうこうしているうちに阿佐ヶ谷の商店街が七夕祭りを始めた。『ぼんぼん倶楽部』も、われわれも何かやらなくてはと思ったんだ」(城石昇さん)。「阿佐ヶ谷七夕祭りのことも頭にあって、うらやましかった。同区内だしライバル意識はあった」[(河原廣さん(85)、中川昌夫さん(74)、森田昇栄さん)と、とくに阿佐ヶ谷への強い対抗意識は誰もがもっていたようです。

これはとんでもないことになった!

「魚屋の茂木晴吉さん(故人)が『阿波おどりってのをやってみないか?』といい出した。誰もが知らなかったけれど、『まあ、じゃあ、やってみようか』という雰囲気になったんだ」というのは、河原廣さんの記憶です。この「なんとなく決まった」のが、その後の高円寺阿波おどりの第一歩だったとは!「でも阿波おどりに限らず、踊りができる人なんて誰もいなかったんだから、不安だったよ。とんでもないことになったと思った。それでもどうしても街の活性化のために、何かはしなくちゃと思ったけれど」(城石昇さん)「偉いことになったと思ったよ。内心では嫌だったけれど、やる以上は協力しよう」と一生懸命だった」[中村健一郎さん(82)]。いずれにしても個人の思いが優先ではなく、みんな高円寺のために何かしなくてはという強い意志もっていたのです。

*ここに表したものは、すべて個人の古い記憶を基にしています。

事実とは異なっていること、時系列に沿っていない内容もあることを、あらかじめご了承ください。

●第1回目 昭和32年(1957年)

- ・8月13日、高南商盛会(現高円寺南商店街振興組合)に青年部が誕生
- ・その記念に「高円寺ばか踊り」を実施
- ・花柳流の師匠に手ほどきを受け、白塗り化粧をして本番を踊る

記念すべき、第1回目「ばか踊り」

本当の踊りコースは？

「高円寺阿波おどり発祥の地は高円寺パル」といわれていますが、第1回目のコースは「現在の叶屋さんと和田屋さんの間にある長仙寺に続く路地がスタート。そこから桃園川(現在の桃園川緑道)まで踊ったよ。所要時間は10分。下り坂だったせいもあって、後ろの者はなかばかけ足についていったことを思い出すなあ」(城石昇さん)。

写真ではわからない衣裳の色

当時から女踊りの衣裳は阿波踊り風です。「ばか踊りとはいえ、イメージは阿波踊りだったから。テレビが普及し始めて、徳島の情報を得ていたのかも？」と山下敬子さん。モノクロ写真では知ることができない衣裳の色についての山下さんの記憶は、「白地に藍染めの柄が入っている浴衣で、ピンクのすそよけ」だったそうです。

伝説の白塗り化粧

素顔を隠すため、白塗り化粧をします。「おかしかったけれど、みんなの熱心な姿に心を打たれて、やらなくちゃと思ったわ」と山下敬子さんの、純粋な少女らしい思い出です。森田昇栄さんは断固白塗りを拒みしました。「370年続く阿波踊りで、誰だかわからないようじゃ無責任だと思ったよ」。現在の高円寺阿波おどりの「本場に倣う」という気持ちは、これを受け継ぐものといえるでしょう。

恐怖心いっぱい

さていよいよスタート。「不安と、通行人の前で踊る恐怖。化粧をして、こんな格好をして表に出て、どうなんだ、と」(中居誠一郎さん)。白塗り拒否派の森田昇栄さんも、その実、「胸はどきどき、足はがくがく。お酒でクツと気付けの一杯でスタートした」そうです。

決まったものの…

知らないということほど、恐ろしいことはないというのは、まさにこのことと、いわんばかりのエピソード。「当時の『ぼんぼん倶楽部』部長から「やるから来いよ」と声がかかったとき、阿波おどりの名前は聞いたことがあるけど、どうやって踊るのかはまったくわからなかった。踊りそのものにも興味さえなかったんだよね」と中居誠一郎さん(83)はいます。けれど「『どんなことをやるんだろう』という興味はあった」と、若者らしい好奇心をもち合わせていたのは確か。阿波踊りに限らず、踊りなんて一度も踊ったことがない者ばかり。ならば踊りの先生に習おうと、近所に住んでいた花柳流の踊りの師匠、立花氏に手ほどきを受けました。「先生に習ったのは1日か2日のみで、そのまま本番だったからいい加減だったよ」と中村健一郎さん。また当時高校2年生だった山下敬子さん(65)は「町内で16歳~20歳くらいまでの若者たちが集められたと思うわ。『やるから集まれ』のみでデレデレしていると呼びにこられるんだから、選択の余地はなかったのよね(笑)。それでも『商店街を盛り上げられるなら』の思いで参加したのよ。だって阿佐ヶ谷が有名になっちゃって、高円寺だって負けていられないって、ね」と、当時は子どもも一丸となって、街を盛り上げようとしていたんですね。

「阿波おどり」が「ばか踊り」に

関西でいう阿呆は、関東のばかとは微妙にニュアンスが違うといいます。けれど当時の高円寺の人々は、それを知るよしありませんでした。「阿波おどりをやろうと決めたりもなかったけど、みんなおちゃらけ踊りだったよ。阿波おどりは徳島では阿呆踊りというらしいし、じゃあこちらの言葉で阿呆はばかだから、ばか踊りにしよう。そんな軽い気持ちで決まったんです」(森田昇栄さん)。しかし子どもには、この名は不評だったよう。「ばか踊りという名前が、とにかく嫌だなと思っていました」(山下敬子さん)。

証言Topic 1

あの定説は間違いだった!?

「七夕は北(仙台)のお祭りだから、高円寺は南のお祭りでいこうじゃないか」との発案があったといわれていますが、「そんな話しは出なかったなあ。ただ飾りつけのお祭りよりも、躍動感があるほうがいけるとは思った。静より動だよ」と森田昇栄さん。静より動。高円寺らしさはこのころすでに根づいていたようです。



森田昇栄さん
「そば茶屋」のご主人
商盛会元宣伝部長
葵新連連長

証言Topic 2

白塗りしたらつまらなくなった!?

「一度目は素顔で踊ったら、沿道から「布団屋の城石さん、がんばって!」と声がかかる。それがとても恥ずかしくて、二度目は白塗りにしてみた。すると今度は誰だかわからないので、まったく声がかからなくなってねえ(笑)。なんだかノレなくなっちゃったよ」というのは城石昇さん。恥ずかしいのとノレるのは、表裏一体なのかもしれませんね!



城石 昇さん
「ベルビア」の前店主
警備一筋で高円寺阿波おどりを支えた



第1回「ばか踊り」の参加者たち
長仙寺の境内にて

「子ども心に『お役に立てるなら』とは思った。でもいかにせん恥ずかしくて」 山下敬子さん

「通行人は『何をやっているんだろう、これは』といった目で見ていた」 中居誠一郎さん



草創期の様子
恥ずかしいやら 楽しいやら

ちんどん屋さんのお囃子で

ところで踊りに欠かせないお囃子はどうしたのでしょうか。「お祝いごとのたびにお願いしていた早稲田通りの方の有名なちんどん屋さんに、第1回目は手伝ってもらったそうです」(山下敬子さん)。阿波踊りにちんどん屋とは！ 今では考えもつかない組み合わせです。そして大変なことに。「クラリネットのおじさんが、勝手にちんどん屋の定番曲である『佐渡おけさ』のメロディを入れてしまった。びっくりしてどうしたものかと思いましたが、連の前のほうが踊り始めていたので、しょうがなくそのままにした」(森田昇栄さん)。どれだけ阿波踊りが知られていなかったかの証拠でしょう。

証言 Topic 3

笠をめくられる!

「踊っていると笠をめくられるのよ(笑)。どんな顔をしているのか、お客さんは気になったのかしらねえ。笠はあっても恥ずかしいせいで、ややうつむき加減で踊っていたので余計にかもしれません。でも男の人からいわせると、笠があつて顔を隠せるからまだいいよって……」と、山下敬子さんの女踊りならではの思い出です。
のんびりした時代らしいエピソードです。



山下敬子さん
元「不二不動産」の娘さん
今回は若き日の貴重な話が伺えた

お客さまの反応は?

恥ずかしさと恐怖心いっぱい踊った記念すべき第1回。お客さまの反応はどんなものだったのでしょうか。「最初は通行人だけしか見物していなかった。何か来たから見てみよう、と立ち止まっている程度」(中居誠一郎さん)。「最初のうちはお客さんもばらばら程度で、珍しいものを見る感じだった」(河原廣さん)。もちろん阿波踊りを知っているお客さまも皆無に近かったらうし、目の前でやられているのが阿波踊りだとも思われなかったのかもしれない。お客さまの反応について、森田さんは「いいわけがなかったと思うよ」といっていますが、「1回目の周囲の反応は好意的だった」と河原廣さんは温かい意見。しかし「1回目が終わってから、『来年はどうする?』という話は出なかった」(河原廣さん) そう。ひょっとして、高円寺阿波おどりは第1回でおしまい!?



斉藤義忠さん
「ミートショップ サイトウ」の御主人
天狗連連長

●第2回目 昭和33年(1958年)

- ・リヤカーにテープレコーダーを積み込んだお囃子が登場
- ・新聞の朝刊に「ナベ底ふつとばすばか踊り」と紹介される。これが新聞報道された第一号
- ・踊りの内容が変わり、白塗り化粧は第2回まで

試行錯誤の2回目

宣伝活動も開始

「学校から帰るとすぐに着物で宣伝カーに乗せられたの。知人が訝しげに寄ってきたり、翌日学校で友達にいわれたり。まんざらでもないのと、恥ずかしい気持ちで複雑だったわ」と山下敬子さん。功をなしてか、2回目から新聞記事に取り上げられることとなります。

白塗り化粧とお囃子は…

白塗り化粧に工夫をほどこす方も現れます。「ポマードを下地に塗ってから白塗りをすると、汗で崩れないんだよ。ただし皮膚呼吸ができなくなるけどね」[富澤義夫さん(75)]。しかしそんな白塗り化粧も、踊り手から『阿波踊りはこんなことしてっこないよ』という声があがって2回目でお蔵入り。お囃子は、新たな手法で挑みます。「3回目は、レコード係がリヤカーを引っ張って故・小澤淳男氏と河原廣氏が合同で作った『高円寺音頭』を歌いながら踊ることになったのに、直前で大学生にチェンジ。一夜漬けなのでまったくダメで、結局小澤さんと中居さんが、大声で歌いながら踊ったんだよ」(森田昇栄さん)。「高円寺音頭」! 今、またぜひ聞いてみたいものですね!



華やかな宣伝カー

毎年踊りが違っていても

誰も阿波踊りを知らないまま、毎年指導者も踊り自体もガラッと変わります。第3回目はよさこいのように、囃子をもって踊ります。「いわれた通りにやっただけ。踊りが毎年違ってさほど疑問に思わず、こんなもんかなあといった感じだった」(河原廣さん)というのが大多数だったようです。

お客さまが増えてきて

宣伝カーや新聞掲載の効果があってか、2回目、3回目となるとお客さんが倍に、またその倍にと増えていったそう。しかし「客寄せのために始めたばかり踊りだったはずなのに、結局みんな商売はそっちのけ。商売人は踊っているから店は空っぽで、お客さんは店に背を向けて見ているし」と中村和男さん(62)がいうように、当初の目論みとはかけ離れていった現実もありました。

証言 Topic 4

草創期からスポンサーがついていた!

「企業に資金援助を頼みに行ったんだ。中川さんは明治乳業に、浅井さんはポリバケツの会社に行った。当時は今に比べて宣伝の機会が少なかったためか、すぐ『いいですよ』との返事をもらえたよ」と当時の会計担当だった中村健一郎さん。草創期からスポンサー集めの活動をしていたとは、さすが商人の街ですね!



中村健一郎さん
元「富士果実」の御主人

「まわりの人の後ろにくっついて、ただ歩いてきた感じだったかなあ」

斉藤義忠さん(64)

「人に見られなくちゃだめだと思った」 中居誠一郎さん

●第3回目 昭和34年(1959年)

- ・低迷を続ける「ばか踊り」、存続の是非を問う1票差でもう1年続ける決定をする
- ・お囃子は杵屋佐三造社中になり、「高円寺音頭」が作曲され、小澤氏、中居氏が歌う
- ・杉並新聞のトップに大きく紹介される

●第4回目 昭和35年(1960年)

- ・警察の道路使用の許可が出ず、関係者が留置場入り覚悟で強行予定。踊り前日に1日だけの使用許可が出る
- ・徳島新聞より木場連の鴨川長二氏を紹介される。8月24日の徳島新聞に紹介記事

●第5回目 昭和36年(1961年)

- ・東京深川・木場の徳島県人で組織する東京踊り会の武市氏の指導を、氷川神社にて受ける
- ・木場連が初参加
- ・チラシ広告を制作

●第6回目 昭和37年(1962年)

- ・新高円寺通り商店会の20数名が、自由参加。現・ルック商店街が参加
- ・徳島新聞社の阿波踊り写真コンクールに、高円寺も応募が可能になり、9名が入選
- ・「東京の阿波おどり」というNHK四国向け放送に出演、NHK霞ヶ関スタジオで木場連と共演

こんなことやっていていいのだろうか？

「もう、やめようよ」

商店街振興策として始めた阿波おどりに対し、やめようという意見が出てきます。「メンバーの考え方は大まかに、せっかく始めたんだから続けようというタイプ、みんなが続けるならついていくタイプ、大変だから反対というタイプの3種類に分けることができた」と城石昇さん。今もなお取り交わされる、踊り子の立場、裏方の意見。また当日は買物どころではなくってしまい、本来の目的が果たせていないというもの。なんと現在に至るまで阿波おどりの問題点は、変わっていないのです。



にぎわいを見せる高円寺

無記名投票。その結果は？

「そこで小澤さん(故人)らの提案で、青年部全員で存続か中止かを決定するために無記名投票を行うことになったんです」と森田昇栄さん。投票の結果は同数で、そこへそのとき議長を務めていた城石昇さんが、最後の1票を投じます。「私の1票で継続が決定した。少なくとも高円寺の名前は広まりつつあり、子どもも大人もこのイベントを楽しみにしてくれている。それにこのイベントを始めたことにより、問題を乗り越えるためにみんなで結束したことが、お互いの絆を深めてくれたと考えたから、存続の票を入れたんだ」(城石昇さん)。「なくなったら、何もなくなってしまふわけだから」と思ったという森田昇栄さん。すでにこの時点で、阿波おどりのない高円寺の街は、個性のない街になるしかなかったのかもしれない。

証言 Topic 5

実は二度あった廃止の危機！?

「1票差で続行が決定したのに、直後の準備に集まったのはたった10人ほどだったから、その場で再度中止の話までもち上がった。お互いに頭にきている面もあったよね。それだから『やめちゃえ』と半ばやけくそになったけど、小澤さんに説得されて、ようやく一件落着となったんだよ」(中村健一郎さん)

本物との出会い

阿波踊り探し

「こんなことをいつまでもやっていたんじゃない、杉並名物どころか高円寺名物にもならない。高円寺流のばか踊りなんていってはいはダメ。東京じゅうにある徳島に関係する場所をすべて訪ねて、本当の阿波踊りを教えてもらったほうがいいんじゃないですか？」と森田昇栄さんが提案したのもこのころ。そこで当時「ぼんぼん倶楽部」の会長だった小澤淳男氏(故人)と森田さんは、東京じゅうの徳島の名がつく場所を訪ね回り始めます。最後に訪ねた徳島新聞社東京支局にて第3回高円寺ばか踊りの写真を見せると、若い記者が小声で「これはいける」とつぶやいたそう。「しめた!と涙が出るほど嬉しかった。高円寺でこんな阿波おどりをやっているという記事を、写真入りで、すぐに徳島向けの朝刊に載せてくれたんです」(森田昇栄さん)。



笠のかぶり方も踊り方も当時の高円寺流

証言 Topic 6

当時はギャラを支払っていた!?

「第6回目くらいに、木場連に合同参加をお願いしたら、20人くらいの方が手伝ってくれたよ。食事を出して、出演料を支払った。確か1人あたり1,000円くらいだったかなあ。今でいうと22,000円~23,000円くらいの額になる」と中村健一郎さん。当時の風潮がわかるエピソードです。



老若男女が楽しめる祭りへ。警備の役員も真剣なまなざし

木場連との出会い

やがて徳島新聞が、当時東京で活動していた木場連を紹介。第6回目から木場へ練習に。「木場に習いにいくまで、正直われわれは、阿波踊りそのものをよく知らなかった。木場連を見て『上手だなあ、カッコいいなあ、違うなあ』と思ったよ」(河原廣さん)。木場連と出会ってはじめて、高円寺の面々はようやく「本物の阿波踊り」に触れることになります。「連長の鴨川さんは優しかったが、ほかの人は厳しかった。木場連としては『阿波踊りを知りもしないで』って気持ちだったんだろうね。こちらは『知らないからこそ、教えて欲しくて来たんだ』ってつもりだったけれど」(中村和男さん)。「材木屋の倉庫の2階での締め太鼓の練習は、騒音を防ぐために、丸太に縄を巻いてたたいた。縄の部分をたたけば音が響かないからね」(冨澤義夫さん)。木場連には踊りだけではなくお囃子も習い、これ以降お囃子が導入されるようになります。



中村和男さん
元「サワヤ家具」の従業員
天狗連連長、連協会会長を歴任、
現在は写楽連総連長



年ごとに人出を増す行事に発展

「最後に議長として自分自身、賛成票を入れた」 城石昇さん

「『高円寺ばか踊り』という名前だと話したら『そんな名前はないよ、冗談じゃない。阿波おどりにしてくれ』といわれた」 中村健一郎さん

●第7回目 昭和38年(1963年)

- ・28日夕刻、猛烈な夕立のため桃園川が氾濫し、出水。無念の思いで踊りは1日中止
- ・名称が「高円寺阿波おどり」に
- ・お囃子2組を編成

●第8回目 昭和39年(1964年)

- ・森田氏、単身徳島を訪問、徳島新聞社のご好意で、木場徳島の有名連を8ミりに克明に収録。高円寺阿波おどりが徳島を学ぶ大きな一歩となる
- ・「阿波おどり展」開催

●第9回目 昭和40年(1965年)

- ・踊り場が青梅街道までの800mに拡大。雨天順延が1日だけ認められるようになる
- ・阿波踊り留学と称して、本番徳島へ商盛会の幹部有志12人が訪問

●第10回目 昭和41年(1966年)

- ・高円寺駅南口広場が踊りのコースに入る
- ・北口銀座商店会有志13名が参加、純情商店会の有志が参加
- ・本場徳島で人気の小野・姓徳氏に誘われ、フジテレビ「ズバリ!当てましょう」に鳴り物6名が出演
- ・現バル商店街に数席登場

「楽しむ人」だけではない

警備が足りない!

観客数もうなぎ上りに増え、それに応じるように踊り手とお客さまへの安全面の配慮が必要になりました。「子どもたちが踊るようになり、きちんとした警備の必要性が出てきた。30人踊り手がいるなら、警備も30人という具合に」(中村健一郎さん)。一見誰もが楽しいはずのお祭りですが、その陰には祭り自体を楽しむわけではない、裏方の協力が必要です。「踊り子がいうことを聞かず、憎まれ役に回らなくてはならなかった」と中川昌夫さんは、今だから懐かしい当時の心情を語ります。



中川昌夫さん
元「三河屋はきもの」の御主人
発足当初より警備、運行担当の裏方専門



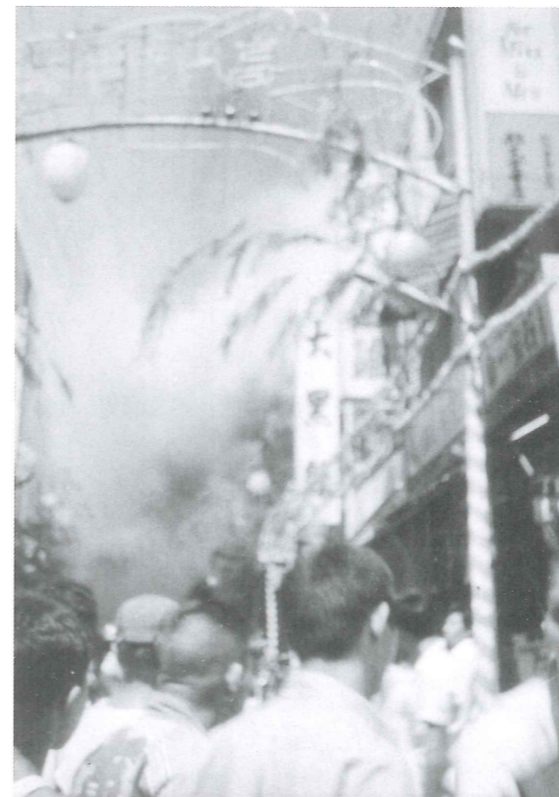
名称も「高円寺阿波踊り」に(写真は昼間のデモンストレーション)



お囃子登場

警察に何度も足を運び

当時はまだ若者が警察に陳情に出向いても、なかなか面談もできない時代。高度経済成長期のまただ中で、公道を一商店街のセールス活動に使うとはけしからんという風潮だったのです。また警備は人の命に関わる事だから、生半可な姿勢では取り組めません。「そこで私はなんとか阿波おどりに関して、警察が好感をもってもらいたいと思い、それに努めた」(城石昇さん)。安全な阿波おどりのために情熱を傾ける城石さんは、前出の木場への練習も行けなかったそう。「そのころから警備に関する警察からの指示がやかましくなった。同時にその前後から、警備を含めた阿波おどりを支える裏方としての、私の役割が定着したんだよ」と、長年裏方に徹する人がいてこそ、現在に続いていることを語ってくれました。



商店街で火災発生!!
このとき、多くの店主が阿波おどりのTV出演中(昭和41年)

第一食堂	百果園	アサヒ	東京青果
のんき	大雅堂	アサヒ	アサヒ
八千代信用金庫	中屋	アサヒ	アサヒ
石川楽場	新屋	アサヒ	アサヒ
南よし	よろずや化粧品	アサヒ	アサヒ
不二屋文具	不二ホール	アサヒ	アサヒ
三河屋はきもの	富沢食品	アサヒ	アサヒ
宮崎洋品	宮田家具	アサヒ	アサヒ
丸中金物	森永菓子	アサヒ	アサヒ
小林テーラー	岩波海苔	アサヒ	アサヒ
豊喜屋呉服	中村洋服	アサヒ	アサヒ
昌美堂カメラ	平和相互銀行	アサヒ	アサヒ
恵電社	サワノ時計	アサヒ	アサヒ
パーあかしゃ	モードストア	アサヒ	アサヒ
山崎証券	塩瀬菓子	アサヒ	アサヒ
パチンコバンビ	日本相互銀行	アサヒ	アサヒ
紅屋糸	アサヒ薬局	アサヒ	アサヒ
大村そば	和田屋喫茶	アサヒ	アサヒ
フルーツパーラー	中華三福	アサヒ	アサヒ
新橋屋はきもの	アサイ洋服	アサヒ	アサヒ
叶屋時計	大黒鮑	アサヒ	アサヒ
和田洋品	イゾツ洋品	アサヒ	アサヒ
クローバー	邦文堂書店	アサヒ	アサヒ
秋田屋金物	坂井菓子	アサヒ	アサヒ
いろは堂玩具	ナカイ洋品	アサヒ	アサヒ
美吉屋	山城屋茶	アサヒ	アサヒ
信州屋肉	サワヤ家具	アサヒ	アサヒ
ふもと洋品	菊屋化粧品	アサヒ	アサヒ
東京青果	キクヤ洋品	アサヒ	アサヒ
木村パン	進歩堂靴	アサヒ	アサヒ
湘南堂書店	にしき菓子	アサヒ	アサヒ
城石ふとん	不二不動産	アサヒ	アサヒ
嘉志和酒	清水屋呉服	アサヒ	アサヒ
田中ペン	富士果実	アサヒ	アサヒ
紅葉化粧品	大黒屋呉服	アサヒ	アサヒ
秀月そば	神藤青果	アサヒ	アサヒ
花政	田中家うなぎ	アサヒ	アサヒ
パチンコシルバー	昇月庵そば	アサヒ	アサヒ
パチンコ今枝	マルキペーカリー	アサヒ	アサヒ
パチンコ東陽会館	みどり洋品	アサヒ	アサヒ
斉藤肉	ショーキン	アサヒ	アサヒ
愛川屋かまぼこ		アサヒ	アサヒ
大晴魚		アサヒ	アサヒ
おぐら洋服		アサヒ	アサヒ
伊藤ガラス		アサヒ	アサヒ

昭和37年 高円寺駅南本通り

証言 Topic 7

森田さんが泣いた!

第7回の1961(昭和38)年、台風のため桃園川があふれ、もはや中止かという事態に。「森田さんは『どうしてもやるんだ』って涙で訴えて。思えば森田さんは、とにかく熱心だったよね」(河原廣さん)。台風シーズンにも関わらず、50年間で中止になったのは、1961(昭和38)年と2001(平成13)年の2回だけです。



河原 廣さん
商盛元会長
阿波おどり用品も扱う「豊喜屋」の店主

「主催者として時報とともにびたつとやめる。それを徹底することで好印象をもってもらうと努力した」 城石昇さん

いざ徳島へ!そして10年、やがて50年

森田さんの決意

「徳島へようすを見に行ってみよう」と森田昇栄さんは提案しますが同意はなく、そこで「夜行列車→午後3時に徳島到着→阿波踊り見物→深夜0時に大阪行きの船→午前4時に大阪着→始発で東京へ。このスケジュールなら午前中には帰れる」(森田昇栄さん)。まさに脅威のスケジュール!

本場の踊りに圧倒されて…

初めて見る本場の阿波踊りを写真と8ミリビデオにおさめ、東京で仲間と鑑賞します。「本場のレベルの高さに、みんなただ驚いていました。それが功をなしたと思います」(森田昇栄さん)。「みんなで徳島へ行ってみよう!」。こんな声が上がって貯金を始め、翌年には12人が徳島へ旅立ちました。「徳島は、自然体で阿波踊り一色。何よりも踊りのレベルが高い」(城石昇さん)。今の高円寺阿波おどりは、このときの刺激によって後押しされたのでしょう。

証言Topic8

初徳島で、有名連に混ざって!?

「仲間と初めて徳島へ行ったとき、旅館の浴衣を着て自由に踊る連があったんで、一緒に行った仲間4、5人と入ったんだ。初めてだし、要領がわからなくてノロノロやっていたら、後ろに続いていた有名連の先頭に混ざっちゃったんだよ。今改めて考えると、恥ずかしいねえ(笑)」

(富澤義夫さん)。「初めて」は、誰でも一緒なんですわね!



富澤義夫さん
「とみざわ屋」の御主人
鳴り物誕生以来、鳴り物一筋

活気ある祭りに成長

こうして紆余曲折しつつも、高円寺阿波おどりは10周年を迎えます。「10周年のときには、連の提灯が14、5本も並ぶまでになった」と森田昇栄さん。ばか踊り時代には、想像もしていなかったとか。多感な少女期を、草創期の高円寺阿波おどりとともに過ごした山下敬子さんは「これからも時代とともに変わっていくのだからと思いますよ。でもね、高円寺の街そのものが盛り上がり行ければ、それが一番いいことだと私は思っています」。高円寺に生まれ育った方ならではの深い言葉です。

第1回目からその中心的立場であり、警備という重要な立場で高円寺阿波おどりを守り、その成長を見守って来た城石昇さんの言葉で、この項を締めくくります。「商盛会青年部の仲間と始めたイベントも今では全国から多くの方々が参加され、見物のためにこの高円寺にお出かけくださるほどに成長した。いい出しっぺのひとりである私は、ときには家族をないがしろにしているかに見えるほど、阿波おどりにかけた時期もあった。しかし84歳になった今も、阿波おどりを通じて多くの出会いをし、当時のことを質問されたりもする。こうした地域や家族とのつながりを、高円寺阿波おどりの縁がもたらしてくれることを本当に幸福に思っている」。

第11回～50回のあゆみ

●第11回目(昭和42年)

- ・高円寺北口の高円寺銀座商店会協同組合が正式に参加
- ・徳島から小野正己連長率いる「葵連」(15名)が姉妹連「葵新連」の誕生を祝って友情出演。
- ・「葵連」により踊り勉強会が、神戸銀行(現三井住友銀行)3階ホールで開催。大人気を博す

●第12回目(昭和43年)

- ・高円寺阿波おどり写真コンテストが始まる

●第13回目(昭和44年)

- ・高円寺南口駅前、高南通りの一部が完成。町会の多大な協力を得、大演舞場となる(現在の中央演舞場)

●第14回目(昭和45年)

- ・阿波おどりを年中行事とする商店会に呼びかけ、親睦および情報交換、技術指導、相互援授を目的とした「東京都商店街阿波おどり振興会」という組織を結成(2～3年で消滅)

●第15回目(昭和46年)

- ・本格的なポスターを製作。国電(現JR東日本)の車内広告や駅貼り広告まで行う
- ・前夜祭がはじまる
- ・サンケイ新聞後援となる。徳島県知事より、阿波おどり普及により感謝状をいただく
- ・第1回高円寺阿波おどり連人気コンテストが実施され、菊水連がNO.1に(1年で消滅)

●第16回目(昭和47年)

- ・徳島県知事、徳島市長より優勝旗等が贈られる
- ・独立連がほぼ勢揃いし、主力連が技を競いあう時代に入る
- ・国鉄(現JR東日本)高円寺駅主催の「本場阿波おどり観光団」に500名が参加

●第17回目(昭和48年)

- ・広告提灯用の電線が急に不足、そして大幅値上げ。オイルショックの前兆あり

●第18回目(昭和49年)

- ・池袋の「大地祭」始まる。阿波踊りを主体にしたお祭り、高円寺が全面的にバックアップ。第9回まで続く

●第19回目(昭和50年)

- ・地元高円寺の有力15連が「連長会」を発足

●第20回目(昭和51年)

- ・アメリカ建国二百年祭の催し物としてサンフランシスコ、ロサンゼルス、ホノルルの三都市から招待を受け、海外公演を成功させる。以降、海外からの招待が続く
- ・朝日新聞社が後援となる

●第21回目(昭和52年)

- ・高円寺阿波踊り振興協会(現NPO法人東京高円寺阿波おどり振興協会)設立

●第22回目(昭和53年)

- ・ドイツ・ハンブルグに高円寺連協会合同連が遠征
- ・商工会議所100年記念、全国郷土祭に出演。天皇陛下ご臨席のもと、徳島からは150人、高円寺からは600名が、昼は選抜隊、夜は全員で踊る

●第23回目(昭和54年)

- ・「オール高円寺連」が初めて徳島の阿波踊りに参加
- ・ワールドカップ世界体操選手権のアトラクションに出場(於・国立代々木競技場)

●第24回目(昭和55年)

- ・新たに都知事杯、区長杯を作成、優秀連に贈られる
- ・消防100年全国大会が後楽園球場で天皇陛下ご臨席のもと行われ、徳島から100名、高円寺から200名が合同で踊る



昭和42年ごろの高円寺北口

「われわれも、今のままではいけない。学びたい、教えるを請いたいと思った」

城石昇さん

●第25回目(昭和56年)

- ・25周年記念行事として、連協会主催の徳島旅行にバス2台、80名が参加
- ・「連長会」を発展解消し、「高円寺阿波おどり連協会」を設立。現場サイドから高円寺阿波おどりの発展に尽力する態勢を整えた

●第26回目(昭和57年)

- ・東京都の国際文化交流事業による民間親善使節団として、ハワイ最大の祭り「アロハ・ウィーク」に100名が参加(9月16日～21日)

●第27回目(昭和58年)

- ・深川・木場の天恵連(元・木場連)が20年ぶりに登場。それは高円寺の阿波おどりの恩人、同連の元連長の鴨川長二氏(同年5月27日・75歳で死去)の追悼をかねたものだった

●第28回目(昭和59年)

- ・南フランス・ニースのジャパンフェスティバルに80名が参加
- ・NHKの教育セミナー「ふるさとの発見・高円寺阿波踊り」が放映され、この番組をきっかけに、長年途絶えていた氷川神社の奉納阿波おどりが復活

●第29回(昭和60年)

- ・立教大学社会学部の松平誠教授の研究室が、高円寺阿波おどりを本格的に研究。研究成果は「人類学：現代都市祝祭の構成—高円寺阿波おどり/昭和63年」に掲載

●第30回(昭和61年)

- ・30周年記念誌「どよめきの三十年—おどれ高円寺」が発刊される
- ・本場徳島より徳島県阿波踊り協会の連長会の14連37名が30周年を祝して友情出演。名人達の乱舞に高円寺は沸きかえった
- ・イタリア・フィレンツェのジャパンウィークに参加(10月)



いろは連・初代連長 上村明男氏

●第31回(昭和62年)

- ・オランダ・ユトレヒトのジャパンウィークに85名が参加。ジャパンウィークでは欧州各国を回ったが、最大規模のジャパンウィークであった

●第32回(昭和63年)

- ・オーストラリア・シドニーのオペラハウスで開かれた、建国二百年祭に86名が参加
- ・天狗連の姉妹連の徳島『平和連』が高円寺に初登場
- ・銀座商店会が参加以来、多大な貢献をされたいろは連・初代連長 上村明男氏が死去

●第33回(昭和64年)

- ・昭和天皇が崩御。元号が「平成」に。多くの行事が中止になるも例年通りの開催となった。徳島『芸茶楽連』が友情出演
- ・10月、横浜港市制百周年記念祭に高円寺より外部出演としては最大の300名が参加



志留波阿連の姉妹連・みやび連

●第35回(平成三年)

- ・杉並区が北海道風連町、群馬県吾妻町と友好関係を結び、交流の一環として風連町白樺まつり、吾妻町岩櫃まつりに参加
- ・第三回世界陸上選手権大会の閉会式に登場、カール・ルイスなど選手も共に踊る
- ・徳島より「芸茶楽連」、志留波阿連の姉妹連「みやび連」、いろは連の友好連「水玉連」が高円寺に友情出演

●第36回(平成四年)

- ・8月、四国放送テレビ「そうなんです、阿波踊りなんです。」の番組で、高円寺の歴史と阿波おどりが紺屋町演舞場で生放送された
- ・中国・北京の日中国交正常化20周年記念行事に参加(9月)

●第37回(平成五年)

- ・大会前日、大型で強い台風11号が関東に上陸。開催が危ぶまれたが27日は開催を30分遅らせて決行となった
- ・年末恒例の「NHK紅白歌合戦」に50名が参加
- ・銀座商店会が参加以来、多大に貢献された商店会元副理事長、関一三氏が死去



商店会元副理事長、関一三氏

●第38回(平成六年)

- ・東京都とオーストラリア・ニューサウスウェールズ州の友好都市提携10周年と、杉並区とウィロビー市との友好都市提携4周年を記念して、振興協会88名が現地で阿波おどりを披露

●第39回(平成七年)

- ・阪神淡路大震災が発生。被災者救援のために高円寺駅前にて連協会所属連が、チャリティ阿波おどりを実施、集まった義援金は1,108,823円(2月)
- ・東京商工会議所創立12周年記念祭(3月)世界柔道選手権大会閉会式(10月)
- ・徳島より「歌舞伎連」が友情出演
- ・高円寺阿波おどり連協会会長として活躍した飛鳥連初代連長、関根敏邦氏が死去



飛鳥連初代連長 関根敏邦氏

●第40回(平成八年)

- ・40周年記念誌「めくるめく発展の四十年おどれ高円寺」を発刊。記念ビデオ製作
- ・高南通りを踊り場とした立役者、氷川町会元会長、齋藤信夫氏が死去



氷川町会元会長 齋藤信夫氏

●第41回(平成九年)

- ・読売文化センター(船橋ららぽーと)のカルチャー講座に阿波おどりが登場。志留波阿連、ひよつとこ連が指導にあたる



ひよつとこ連の友好連・うずき連

●第42回(平成十年)

- ・飛び入り参加自由の高円寺名物の「びつくり連」に続き、当日に是非踊ってみたいという観客の要望に応えるために、「にわか連」が誕生。連協会所属連の後ろについて楽しみに踊るのは200～300名!! 圧巻であった

●第43回(平成十一年)

- ・振興協会や各商店街事務所に頻繁にかかる問い合わせの電話に対応すべく、高円寺バル商店街が「阿波おどりマップ」を製作。街頭や駅で配布し、観客からも好評を得る。「ひよつとこ連」の友好連である徳島「うずき連」が友情出演

●第44回(平成十二年)

- ・「飛鳥連」「江戸っ子連」が結成30周年を迎え、その記念として徳島の姉妹連「娯茶平連」「阿呆連」が初めて高円寺阿波おどりに登場し、各演舞場で師弟共演が実現する
- ・昭和52年に誕生した「高円寺阿波踊振興協会」初代会長、草柳勝治氏が死去



飛鳥連と娯茶平

●第45回(平成十三年)

- ・高円寺阿波おどりに多大に貢献した東京阿波踊振興協会会長・小澤淳男氏が7月に死去
- ・28日、開始直後に突然の集中豪雨となり、危険防止のため中止となった
- ・地元杉並区が共催に加わる。会場周辺で歩行者の一方通行を実施

●第46回(平成十四年)

- ・「東京阿波踊振興協会」の名称が「東京阿波おどり振興協会」と変更される
- ・高円寺阿波おどりに多大に寄与された、東京阿波おどり振興協会副会長・塚本忠吉氏が6月に死去。また、草創期より踊り一筋の「天狗連」神藤信一氏が8月に死去



江戸っ子連と阿呆連

●第47回(平成十五年)

- ・第45回大会を教訓として、関係各機関と協議を重ね「緊急時対応マニュアル」を作成、文書化して厳格を期することとした

●第48回(平成十六年)

- ・高円寺阿波おどり組織活性化委員会が発足、協賛者席・参加費の導入を行い、NPO法人化を目指す。
- ・中越大地震が発生。被災者救援のために高円寺駅前にて連協会所属連が、チャリティ阿波おどりを実施、集まった義援金は942,797円(11月13日)

●第49回(平成十七年)

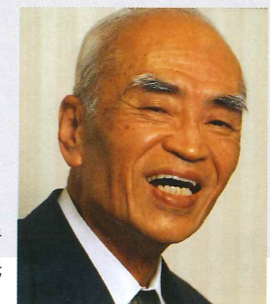
- ・東京高円寺阿波おどり振興協会がNPO法人として認証を受ける
- ・おどれ高円寺セッション2005が初めて有料化(1000円)となる
- ・27日、史上最多の77連が参加。開催日を8月の最終土日に変更



振興協会初代会長 草柳勝治氏

●第50回(平成十八年)

- ・開催時間を午後6時から9時までに変更
- ・記念誌「踊れ高円寺—人が創り街が育む五十年」を発刊
- ・「高円寺阿波おどり50周年の夕べ」をセッション杉並にて開催

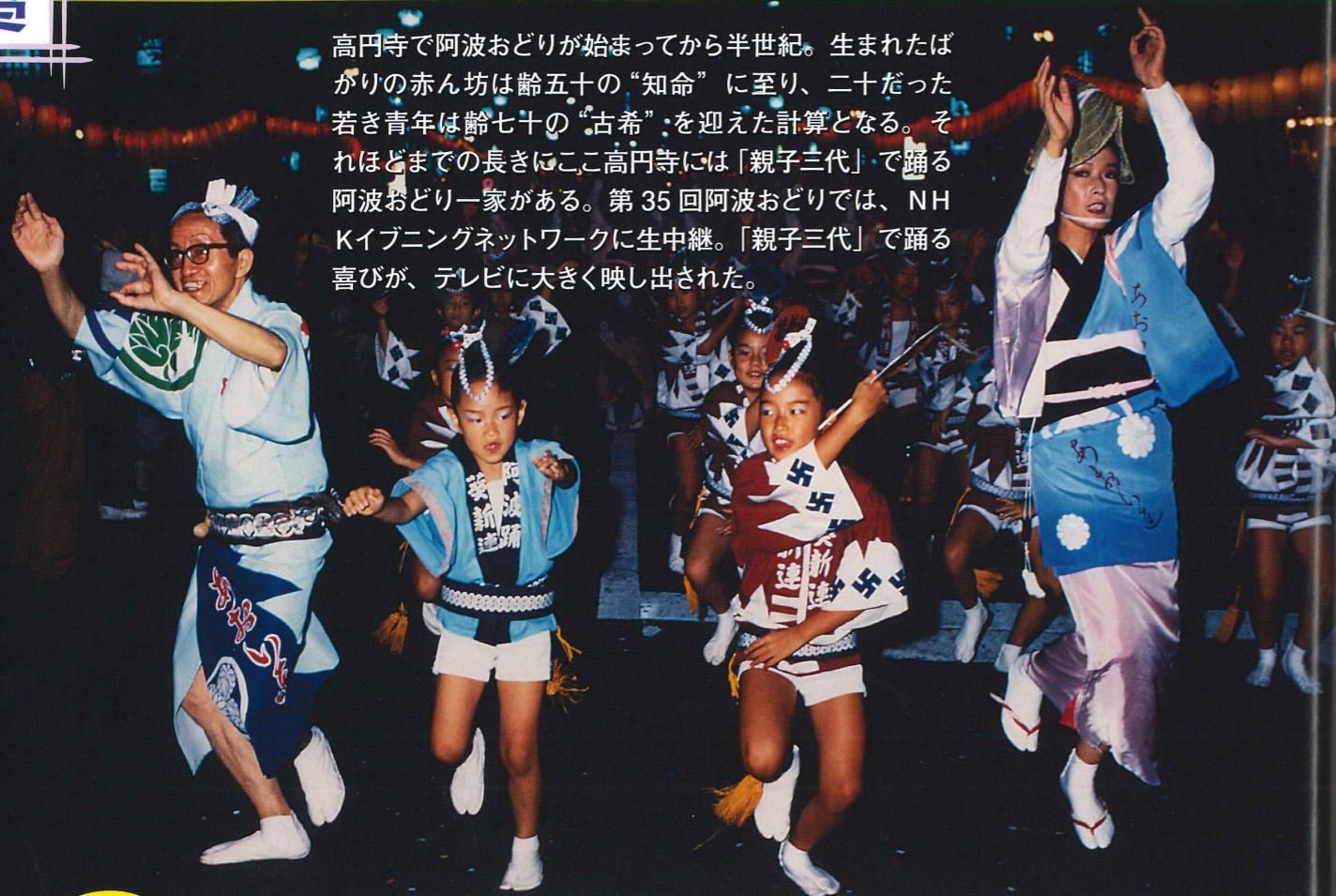


阿波おどり発足時からの功績者 小澤淳男氏

「親子三代」で踊る歡び 阿波おどりは家族をつなぐ絆の証

森田昇栄さん
御一家

高円寺で阿波おどりが始まってから半世紀。生まれたばかりの赤ん坊は齢五十の“知命”に至り、二十だった若き青年は齢七十の“古希”を迎えた計算となる。それほどまでの長きにここ高円寺には「親子三代」で踊る阿波おどり一家がある。第35回阿波おどりでは、NHKイブニングネットワークに生中継。「親子三代」で踊る喜びが、テレビに大きく映し出された。



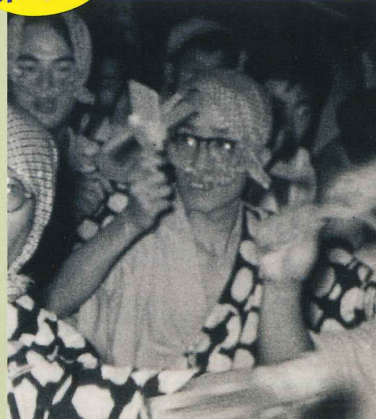
第35回 (平成3年8月27日) NHKテレビイブニングネットワーク「親子三代」生中継/高円寺中央演舞場

「これは孫娘がデビューしたときの写真です。こうやって昔からの写真をぜんぶ綴じてあるんです。」

積み重ねられたアルバムを前にそう語るのは、

葵新連の連長・森田昇栄さん。八十歳にして現役の踊り手であり、50年間一度も欠かすことなく参加し続けてきた高円寺阿波おどりの「生き字引」的存在。第1回から作成している自作ア

第1回 (昭和32年) 初代・昇栄さんデビュー!



当時まだ30歳すぎの青年だった昇栄さん。何もかもが初めての経験で、「お囃子がなっているのに、足がすくんでなかなか前に進むこともできませんでした。本当に冷や汗ものでした」と振り返る。

写真は第3回(昭和34年)、両手に鳴子を握り、まるで土佐のよさこい阿波踊り。

第5回 (昭和36年) 二代目・真由美さんデビュー!



二代目・真由美さんのデビューは5歳。小学校6年生のときには、昇栄さんと共に徳島へ渡り、本格的な指導を受ける。徳島から戻ってきた後、踊りを教えてくれるお姉さんに「アナタの教えた踊りは阿波おどりじゃない!」といい放ったとの逸話も。

第28回 (昭和59年) 三代目・杏里さんデビュー!



「親子三代」が実現したのは、杏里さんがデビューした第28回。その数日前には、一家で本家・徳島を訪れ、踊りの指導を受け、その様子は地元の新聞でも「親子三代夢かなう」と、大きく紹介された。後ろで踊る父親の将令さんも嬉しそう。

第33回 (平成元年) 三代目・このみさんデビュー!



「物心がついたら踊っていた」というこのみさんのデビューは平成元年。「お姉ちゃんが女踊りなら」ということで、男踊りに挑戦。おじいちゃん、お姉ちゃんを見ながら、一生懸命踊る姿は愛らしいと評判に。

アルバムは、実に200冊以上にも及ぶ。阿波おどりや家族の歴史が収められた、森田家の「家宝」だ。

一家は、娘の真由美さんとその夫の将令さん、孫娘の杏里さんとこのみさんという構成で、今は裏方に回っている真由美さんを除く4人は、毎年欠かさず祭りに参加している。すなわち、「親子三代」で踊る生粋の阿波おどり一家。365日、家族で踊ることが話題にならない日はないので、「皆、踊りについて熱くなりすぎ。意見がぶつかって大変です」と、娘の真由美さんは苦笑する。

そんな森田家だが、「家族で誰が一番上手か」との問いには、真由美さんの夫・将令さんと口を揃える。現在、葵新連の副連長を務める将令さんは、連のメンバーを統率するリーダー的存在。葵新連の踊り手の実に9割以上は、将令さんの教え子だという。踊りの腕前もさることながら、教え上手という意味でも家族全員が一目を置く存在だ。

そんな葵新連の先頭に立って踊るのが、連長の昇栄さん。「踊っている最中は、やっぱり後ろにいる孫娘たちが気になります。でも、親子三代で踊れるのは最高に嬉しい」と目を細める。

そんな昇栄さんを孫娘の杏里さんは「今も現役なのはスゴイし、踊っている姿はカッコいい」という。だが、当の昇栄さんは「家族で一番踊りがヘタなのは私。娘はもちろん、孫娘たちの方がずっと上手です」と至って謙虚だ。

一家の踊り好きは骨の髄まで染み渡っていて、



もう一人の孫娘・このみさんは「阿波踊りのお囃子を聞くとつい体が反応してしまう」という。このみさんは現在、テレビドラマ「金八先生」にも出演するなど駆け出しの役者として活躍中だが、その演技力も阿波おどりで培われたものかもしれない。

父から子へ、子から孫へと世代を越えて踊り継がれてきた高円寺阿波おどり。それは、森田家の「誇り」であり、家族をつなぐ「絆」でもある。「おじいちゃんたちが始め、伝えてきたもの。私たちが絶やさないように広めていきたい」と杏里さんは目を輝かせる。

杏里さんも、このみさんも、自分に子どもができれば「絶対に踊らせたい」とのこと。「親子四代」の阿波おどりが見られる日も、決して遠くないのかもしれない。

おやこあわ 親子で阿波おどり

高円寺阿波おどりは、昭和32年の第1回目は大人だけが踊っていました。そして50年を経た今では、こんなにたくさんの親子が踊っています。



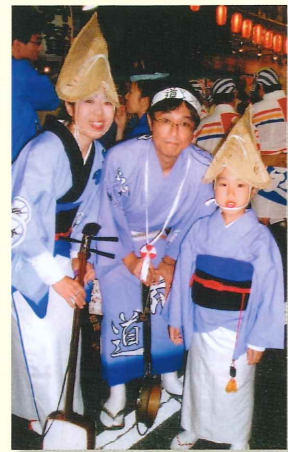
▲葵新連 左から
仁平美優(8年目) 仁平勝(28年目)



▲葵新連 左から
柴田 さよ(10年目) 柴田 ふゆみ(4年目)
柴田 桂太(8年目)



▲葵新連 左から
小泉 優(7年目)
小泉 恵子(3年目)



▲飛鳥連
川口 正仁(11年目)
川口 真実(8年目)
川口 ひとみ(11年目)

▲花道連 左から
名和美鈴(7年目) 名和 一成(20年目)
名和舞雅(7年目)



▲ひさご連 左から
石井 文彦(8年目) 石井 邦美(14年目)
石井 源太(1年目)



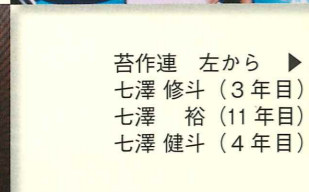
▲しのぶ連 左から
青木 康郎(38年目) 青木 千恵(18年目)



▲ひさご連 左から
澤 絵里子(12年目)
澤 暁子(9年目)
澤 夏希(12年目)



▲しのぶ連 左から
菊池 純子(11年目)
菊池 諒(6年目)



▲苔作連 左から
七澤 修斗(3年目)
七澤 裕(11年目)
七澤 健斗(4年目)



▲しのぶ連 左から
森 啓太郎(10年目) 森 健史(32年目)

▲しのぶ連
加倉井 美樹(17年目)
加倉井 啓雄(35年目)
加倉井 希代衣(5年目)
加倉井 佑季子(5年目)



▲志留波阿連 左から
松田 浩史(8年目) 松田 のの子(5年目)



▲志留波阿連 左から
山口 彩希(3年目)
山口 和子(3年目)

▲志留波阿連
百手 幸治(5年目)
百手 一也(10年目)
百手 澁沢(10年目)
百手 澁沢(10年目)
百手 澁沢(10年目)



▲松茸
原田 玲奈(4年目)
原田 とみ(4年目)



▲天水連
岩浪 涼祐(5年目)
岩浪 則彦(29年目)
岩浪 竜也(9年目)



▲飛鳥連
齋藤 昇司(17年目)
齋藤 佳代子(5年目)
齋藤 雄貴(5年目)



▲江戸っ子連 左から
杉谷 ゆき絵(30年目)
杉谷 宗彦(40年目)
杉谷 ちさと(28年目)



▲えふあいえい連 左から
渡辺 次郎(30年目) 渡辺 かおる(26年目)
渡辺 昌樹(7年目) 渡辺 茂樹(7年目)

▼写楽連 左から
国藤 香(2年目)
国藤 夕那(3年目)

▼舞蝶連
津野 至浩(5年目)
津野 寿子(4年目)
津野 花(5年目)
津野 日向(3年目)



▲写楽連 左から
鈴木 杏那(2年目)
鈴木 康夫(20年目)



▲写楽連
中村 雄太(7年目)
中村 慶輔(35年目)
中村 香織(28年目)



▲天狗連
小林 奈々穂(4年目)
小林 和彦(11年目)
小林 和典(2年目)



▲飛鳥連
宗像 和行(14年目)
宗像 朝美(15年目)
宗像 治美(11年目)
宗像 頼美(14年目)